九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「壮大なる耳目の世界」（上）：ワーヅワースの空間感覚、其他について

前川，俊一

https://doi.org/10.15017/2332922

出版情報：文學研究. 45, pp.1-29, 1953-03-10. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「壮大なる耳目の世界」(1)（上）

――ワーズワースの空間感覚、其他について――

前川俊一

一

ワーズワースが漸くその独自の詩風を示しはじめた頃の作品の一つに次の小品がある。

A Night-Piece

――The sky is overcast

With a continuous cloud of texture close,
Heavy and wan, all whitened by the Moon,
Which through that veil is indistinctly seen,
A dull, contracted circle, yielding light
So feebly spread that not a shadow falls,
Chequering the ground――from rock, plant, tree, or tower.

At length a pleasant instantaneous gleam
Startles the pensive traveller while he treads
His lonesome path, with unobserving eye
Bent earthwards; he looks up —— the clouds are split
Asunder, —— and above his head he sees
The clear Moon, and the glory of the heavens.
There, in a black-blue vault she sails along,
Followed by multitudes of stars, that, small
And sharp, and bright, along the dark abyss
Drive as she drives: how fast they wheel away,
Yet vanish not! — the wind is in the tree,
But they are silent; — still they roll along
Immeasurably distant; and the vault,
Built round by those white clouds, enormous clouds,
Still deepens its unfathomable depth.
At length the Vision closes; and the mind,

Not undisturbed by the delight it feels,
Which slowly settles into peaceful calm,
Is left to muse upon the solemn scene.

夜景詩

——空は
一面の緻密な雲で蔽はれて、
どんよりと青ざめ、月ですつかり
白ちやけてゐる。
月はヴェールを通してぼんやり見え、
にぶい、ちぢまつた円光は、弱々しい光を
散らすばかり、—岩、草、木、塔からは
地面を班に染める影一つ落ちない。
やがて、俄かにこころよい輝きが
ぼんやり眼を伏せて、ひとり歩いてゐる
思ひに沈んだ旅人をわれにかへらせる。
見上げると——雲間が裂けて

壯大なる耳目の世界（上）

——頭上に皎々たる月と
天空の壯観が見られるのだ。
月は多数の星々をしたがへて
かなた闇青の穹窿を飛走する。
星々は、小さく、鋭く、明るく、
闇の深淵を
月と共に疾駆する。彼等は旋回しつつも
消え去らない——風は木に鳴るも
彼等は黙然——無限のかなたを
旋転しつづけるのだ。そして白雲、
広大な雲にかこまれて立つ穹窿は
底知れぬ深さをいやましに加へ行く。
やがてこの光景に幕が下りる。
そして心は
よろこびにゆすぶられながらも
おもむろに平和な静けさにかへり行き、

ひとり、この厳かな光景に

思ひふけるのだ。

この詩は、当時同居生活を営んでゐたワーヅワース兄妹が「同じ考へを考へ、同じ言葉を用ゐた顕著な一例」としてG・M・ハーパーのワーヅワース評伝中に引用するところである。即ち、ドロシーの日記の一七九八年一月廿五日の項を見ると次の通り。

Went to Poole's after tea. The sky spread over with one continuous cloud, whitened by the light of the moon, which, though her dim shape was seen, did not throw forth so strong a light as to chequer the earth with shadows. At once the clouds seemed to cleave asunder, and left her in the centre of a black-blue vault. She sailed along, followed by multitudes of stars, small, and bright, and sharp. Their brightness seemed concentrated (half-moon)

（お茶のあと、プール家に向けて出発。空は月の光で白ちやけた切れ目のない一面の雲で蔽はれてゐた。月はぼんやり見えてゐたが、地面と影で斑に染める程の強い光を投じなかつた。急に雲が切り裂かれたかと思ふと、月が闇青の穹窿の只中にかゝつてゐた。月は小さく、明るく、そして鋭い多数の星をしたがへて飛走してゐた。それらの光は凝集してゐるやうに見えた（半月だつた）。）

この詩の執筆後殆んど五十年を経て、ワーヅワースはフェニツク・ノートの中でこの詩に触れて「ネザストウエイとオールフオクスデンとの間の路上で即興的に作つたもの。『見上げると、雲間が裂けて、云々』としるされてゐる、あの驚

きの瞬間をはつきり記憶してゐる。」と述べてゐる。この詩の執筆の日附については、ウイリアム・ナイト編纂の詩集の中では、「一七九八年作る」とあるだけで、月日を書いてないが、T・ハッチンスン編纂の所謂オクスフォード・ワーヅワース中には「一七九八年一月廿五日作る」と明記してある。またワーヅワース詩集の、最新最良の版とも云ふべき、ド・セリンコート編纂の刋本の中でもハッチンスンの与へた日附をそのまゝ踏襲してをり、その上、巻末の註の中で「D・W・の一七九八年一月廿五日の日記の記載はW・のこの『即興』詩に負うてゐるのにちがひない」と断定してゐる。しかし、果してさうであらうか。まづ作詩の日附であるが、ハッチンスン、ド・セリンコートの両氏は、先きのフェニック・ノートの記載を決定的なものと考へて、その記載とドロシーの一月廿五日の項の記入とを照合した結果、その雙方が予盾なく一致する作詩の日附として、一月廿五日を採用したのではなからうか。しかし、このフェニック・ノートなるものは、ワーヅワース自身の口述にもとづいて作られたとは云へ、すでに高齢に達してから、自分の記憶にもとづいて述べたものであるだけに、思ひちがひや、時としては意識的な嘘まで交つてゐることは、いくつかその証拠がある。このやうなたちのものに無条件の信頼を置くことは危険である。さて、先きに引用したワーヅワースの「夜景詩」とドロシーの日記の一月廿五日の項の記述とは、事柄だけでなく、その用語の末に至るまで、酷似した点が多いから、どちらかが他方の記述を参考して書いたことは疑ふ余地がないであらう。それでは、どちらが先きに書かれたものであらうか。

ドロシーの日記の同年一月卅一日の項に記されてゐる、次の一節を見よ。

'Set forward to Stowey at half-past five. A violent storm in the wood; sheltered under the hollies. When we left home the moon immensely large, the sky scattered over with clouds. *These soon*

closed in, contracting the dimensions of the moon without concealing her.（イタリックは評者が施したもの）

（五時半ストウェイに向つて出発、森でひどい夕立に逢ふ。ひひらぎの蔭に避ける。家を出たときは月が素敵に大きくて、空には雲がちらばつてゐた。雲はぢきに閉ぢて、そのため月は全然隠れはしなかつたが、大きさがちぢまつて見えた。」(2)

さて、ドロシーの記載によつて明らかなやうに、一月廿五日の夜は半月であつた。ところがワーヅワースは雲にかくれておぼろげに見える月を形容して 'a dull, contracted circle' といつてゐる。即ち彼はそれを満月の夜にしてゐるのである。恐らく彼は、半月よりも満月にした方が、雲間からあらはれる月がより感銘深いと考へたのであらう。そしてそれについては、卅一日の晩、ドロシーと一緒に見た「素敵に大きい月」の印象が彼の脳裡に働いてゐるであらう。そして、かういふ変化を加へたために「夜景詩」の中の敍述には、一寸した矛盾が出来てきてゐる。「多数の星をしたがへて、」飛走する月は、満月にふさはしからぬことだからである。そして詩中の、'a dull, contracted circle' が卅一日夜の印象、特にドロシー自身のその夜の項の記載に負うてゐることは両者の用語を比較すれば明瞭である。また詩中に、「風は木に鳴る」とあるのも、卅一日夜の夕立一過後の印象の名残りを示すものであらう。つまり、ワーヅワースはドロシーの一月廿五日の記載事項と同月卅一日の記載事項をつきまぜて、この詩を作り出してゐるのである。これによつて、少くとも現存の形の「夜景詩」は、早くとも一七九八年一月卅一日夜か、あるひはその後に成つたことが明らかである。ワーヅワースが詩の中で、実は別々の時と処に起つた事件を一箇の事件にまとめてしまつたり、妹や他人の筆になるものを材料

にして、自分の目撃しないことを自分の体験のやうに書きなすことは珍らしいことではない。只、この場合、この光景を彼自身体験したことにはまちがひあるまいが、それは決して彼自身の述懐にあるやうに、路上で「即興的」に完成されたものではなくて、例によつて、あとで自分の経験を反芻し、ドロシーの日記を参照しながら作られたものであらう。この点についてはあとで詳論する。

以上のやうな、ワーヅワース兄妹の間の詩と日記との微妙な照応の例は、外にもいくつか挙げることが出来、作詩に於ける両人の密接な協力関係をものがたるものであるが、そのうち最も著しいものは、ワーヅワースの、普通に「水仙」の名で知られてゐる短詩の場合であらう。この場合は明らかにウイリアムがドロシーの記述にたよつてゐる。といふのは、この詩に対応するドロシーの日記は、一八〇二年四月十五日の項に見られるのに、ウイリアムがこの詩を実際に作つたのは一八〇四年、即ち約二年の日子を隔てゝ作られてゐるのである。以下、どちらもドロシーの日記に負ふところの多い「夜景詩」と「水仙」の二詩を採上げて、それぞれドロシーの日記に於ける記述との関係を検討し、それを手がゝりとして、ワーヅワースの詩の創作過程について考へて見たい。

ドロシー・ワーヅワースが、いろんな点で兄ウイリアムの心性と相通ずるものを持ち、ことに、自然の事象に対して非常に鋭敏でデリケートな耳の持主であつたことは、彼女の日記を読むものゝ誰しも感じるところであらう。「水仙」の詩に対応するドロシーの日記の一節は次の通り。

「わたしらがガウバロウ荘園の向うの森にはいると、水際近くに僅かの水仙が見えた。わたしらは、種子が波にはこばれて岸にたゞよひついて、小さな群落が出来たのだと思つた。だが歩いて行くうちに、次第に数が増して来た。しまひに

は、木立の枝の下に、岸に沿つて田舎の通行税取立道（ターンパイクロウド）くらゐの幅で、長い帯をなしてゐるのを見た。水仙がこんなにも美しいのを見たことがなかつた。彼等は苔蒸した石にまじつて、そのまはりや上にはえてゐた。あるものは、疲れて枕でもするやうに、頭をそれらの石に休めてゐた。他の連中はざわめき、揺れ、踊り、湖をわたつて吹いて来る風と一緒に、まるで笑つてゐるやうだつた。彼等は不断に視線を投げかけ、不断に変化して、とても陽気さうだつた。この風は湖をわたつてぢかに彼等に吹きつけて来た。こゝかしこには小さな集団もあり、更に湖心に近く、僅かの落伍者もあつたが、それらは極わづかで、あの密集した大道の単純さと統一と生命をみだす程ではなかつた。わたしらは何度も足をやすめた。湖はあらし気味で、いろんな距離の波音がきこえて来た。湖の真中あたりは、まるで海だつた。」

これはすでに、単なるなまの事実の記載ではない。そこにはすでに、ある程度の詩化が行はれてゐる。想像力による、材料の選択と、単純化と、ことに主題たる水仙の――その姿態に於て、その賦与された情緒に於て――微妙な人間化が行はれてゐる。そして兄ウイリアムは、妹の施したこの詩化の方向を、そのまゝ受入れながら、それを更に推進め、印象の一層の単純化と集中と充実を加へてゐる。(3)

彼は先づ、ドロシーの日記に言及されてゐる強風の事実をすてゝ、それを微風に変へてしまつた。事実、水仙は微風位で、詩中にあるやうに元気一杯に「頭をふり立て」「はためきをどる」花ではあるまい。(4) このために、詩中に描かれた水仙の姿態は、事実を一歩遠ざかつて、いささか幻想的な感じを帯びて来てゐる。そして事実に加へられたこの大きな変改は、最初の二行の「私は渓や丘の上高くたゞよふ雲のやうに、ひとりさまよつた」といふ奇異な――少くとも欧米人にとつては――比喩とあひ応じて、読者を冒頭から幻想的な雰囲気の中に誘ひ去るに役立つてゐるのである。それから、ドロ

シーは、岸辺に沿つて延びてゐるこの水仙の主たる集団を離れて、あちらこちらにちらばる同じ花の小集団と、「落伍者」の連中に言及してゐるが、ワーヅワースはそれ等を切捨て、更にはそのとき「ドロシーの見たものとしては最も可憐な」[5]石に枕して休んでゐる水仙も省いてしまつた――踊り、笑ひ、さざめく、水仙の主たる集団に印象を集中せんがために。それから、この花のつどひの賑かさ、陽気さと、それを見るものゝ孤独さ、わびしさとを対照させて、印象を一層効果的にするために、観る者を複数から単数にかへてしまつた――事実は、日記にある通り、彼は妹と共にこの光景を眼にしてゐるのである。

以上見て来たことはウイリアムがドロシーの記述に加へた、印象の省略と単純化の主なものであるが、充実化の方向への修正として先づ気附く点は、空間的なひろがりの感じの拡充である。即ち日記では、単にターンパイク道路の幅の「長い帯」a long belt of them（i. e. daffodils）とある、その延長感を更に推し進めて「銀河の中にひかりまたたく星のやうに蜿蜒と、彼等は無限の線を描いてのびてゐた」とうたひ、また第三聯では「彼等の足下の波も躍つてゐた。しかし彼等は喜びに於てきらめく波にまさつてゐた」と述べて、第一聯、第二聯で描写した「はためきをどる」水仙の人間化された姿態に魂を入れると共に、湖面の水を引合ひに出すことによつて、岸辺の水仙の群の蜿蜒たるつらなりと並行してどこまでものびてゐる水面と、その上に躍るさざ波の無限にひろがり行くさまを読者に聯想させ、第二聯に導き入れた銀河の比喩による空間的なひろがりの感覚を側面から補強してゐる。彼はまた水仙の件の集団を、「群衆」'a crowd' と云ひ「軍勢」'a host' と呼び、更には「一万を一眼で見た」とたたみかけて圧倒的な数の印象を読者の脳裡にきざみつける。かうして、この詩に描かれた光景は、自然の一隅の客観的な描写の域を越えて、一個のヴイジョンにまで昂まるの

である。

それでは「夜景詩」の方はどうか。ここには「水仙」に見られるやうな高度の結晶化は見られない。それは一つにはドロシーの記載事実そのものが簡単であり、はじめから、詩に展開すべき素材を豊かに含んでゐなかつたといふこともあらう。いづれにせよ、その詩の前半――雲間が裂けて月が現れるまでの敍述――には水仙の場合のやうな印象の省略や単純化は見られず、かへつて敍述に附加がある。しかしそれは日記の中の、月を蔽ふ雲の簡単な敍述 one continuous cloud に附加して of texture close といひ heavy and wan と形容し、外のところにも dull, feeblyspread と云つた形容詞を連発していささか冗漫な感じを与へ、散文性を強めてゐる。またこの詩でも、「水仙」の場合と同様に、この光景の目撃者が事実は恐らくドロシーとウイリアム自身を含む複数であつたのを、単数にかへ、一人の「旅人」にしてゐる。しかし、「水仙」の場合は孤独の逍遙者の姿をただよふ雲にたとへて、簡潔に余情深く描き出してゐるのに対して、ここでは件の旅人について pensive とか lonesome とか、あるひは unobserving といつた抽象的な形容詞を次々に重ねて説明に堕してゐるところは、「夕の逍遙」や「デスクリプティヴ・スケッチズ」執筆時代の因襲的な詩風をまだ脱却してゐない。悪くいへば、彼は縦のものを横にするために、韻脚の枠のなかにうまくはまるやう、ドロシーの言葉に水ましして行つた感じがしないでもない。

しかし後半になると、趣きはいささか変つて来る。ここでも日記の敍述は、用語にいたるまでそつくりそのまま採られてゐるが、この場合の言葉の添加はある目的を以てされてゐる。それは「水仙」の場合と同じやうに、空間的なひろがりの感覚の強化である。即ち日記にはわづかに vault の一語のうちに暗示されてゐた空の高さ、底の深さの感じが dark

abyss といひ immeasurably distant, deepens its un-fathomable depth といつた言葉でいやましに強調されてゐる。それにここでは、ぽつかり口をあけた天の一角をかこむ巨大な雲の壁を、大寺院の丸天井の内部をかこむ四つの石壁にたとへて、空の穹窿の立体感を一層に深めてゐる。更に、ここにはこの空間的延長感と結びついた運動の感覚の強調が見られる。即ち日記の方では僅かに sail ―それは空に浮動する鳥か、海上に浮ぶ帆船のやうな、緩漫な動きを聯想させる――の一語で暗示されてゐる月の動きを、ここではそれにつき従ふ多数の星と一緒にして、sail に加へて、drive といひ、wheel away といひ、roll along とたたみかけて、この集団が天空をすぎ行く眼に見える速さの感じを強調してゐる――無論それは、周囲の雲全体が速く動いてゐるための見る者の錯覚なのであるが。それにちよつぴり、風に鳴る木と対照させて触れた静けさの感じ。雲間を破つてちらりと覗く、限りなく高く、美しい夜空と、その無限の深みを、静かに、堂々と施回する月と星の集団。観る者にめまひを感じさせるやうな重圧感が読者にも伝はつて来る。

件の二詩をドロシーの日記とくらべて見て、次に気附く点は、日記の方は自然の事象の単なる記述にとどまつてゐる――たとへ、そこに先きに見て来たやうな観察者の主観による微妙な色づけがあるにしても――に対して、詩の方では観察者の内心の経験としての面が重視され、外界の事象の観察者の心理に及ぼす作用が云々されてゐることである。勿論彼は自然の様相のさまざまな変化に細かい注意を怠らないが、注意の焦点は、耳目を通して入り来る自然界の形象や物音に対して微妙複雑な反応をおこす詩人自身の心の姿に向けられてゐる。この点に於て、一七九七年以後に書かれたワーヅワースの自然詩は、それ以前に書かれた「夕の逍遙」や「デスクリプティヴ・スケツチズ」のやうな客観的、記述的な自然と、はつきり一線を劃してゐる。そして、この二つの時期の橋わたしをする、云はば過渡的な詩ともいふべきものが「罪

と不幸」であり、また「辺境の徒」であつたと考へられる。もつとも前者は物語詩であり、後者は劇詩であるが、この二個の作中に現はれる自然が作中の人物—実は作者の分身—と異常な関係に立つてゐること、そしてそれが、この二詩を執筆してゐた当時、作者のうちに進行しつつあつたある心理変転——それが彼の自然観の形成に至大の関係を持つてゐる——を物語るものであることは先きに説いた。[6] それ以後彼の書いた詩は、「諫告と応答」にせよ「局面一新」にせよ、「テインターン・アベイ・ラインズ」にせよ、「霊魂不滅の賦」にせよ、あるひは「童ありき」や、「ピーター・ベル」のやうな物語詩にいたるまで、自然とそれに接する人間の魂との霊妙な交通関係の認識から生れ出たものである。「序曲」に至つては「高度にアブノーマルな意識」[7]の心性のうちに営まれ来つた二者の交渉の隠微の消息を白日の下に照らし出さうといふ、未曾有の試みに外ならない。

さて彼は「水仙」の中で、「私が寝椅子にねそべつて、ぼんやりしてゐるとき、または思ひに沈んでゐるとき、彼等（水仙の群）は孤独時の無上の喜びであるあの内心の眼に閃く。すると私の心はうれしさにあふれ、水仙と共にをどるのだ」といつてゐる。これはワーヅワースの創作心理に関心をもつ者にいろんな問題を暗示する言葉のやうに思はれる。彼は例のフェニツク・ノートで、若年時の作品「夕の逍遙」に触れて、「この中には私が実地に観察しなかつたイメヂは一つとしてない。七十三才の今日でも、それらの大多数が注意に上つた時と所を覚えてゐる」と語つてゐる。この言葉は文字通りには正確とはいへない。[8] しかしワーヅワースが稀に見る強烈で持続的な記憶心象の持主であつたことは、いろんな材料から立証出来るやうに思はれる。彼が「序曲」の中で、「スポツツ・オヴ・タイム」と呼んでゐるやうな、異常な状況の下に受取つた外界の光景は彼の脳裡に深く刻みつけられて、その後機会あるたびに非常に活々と彼の「内心の眼」に

浮び上つて来るものらしい。「序曲」の中でも、彼の少時、友達とスポーツに耽つてゐた際、何かの拍子に「楯の閃きのやうに」彼の肉眼に異常な鮮明さを以て燒附けられた自然のただずまひが、その後、幾度となく彼の心眼に映じ来つたことをのべて、次の通りにいつてゐる。

The scenes which were a witness of that joy
Remained in their substantial lineaments
Depicted on the brain, and to the eye
Were visible, a daily sight

（Prelude 1 ll. 599—602）

（その喜びの目撃者たりし光景は、その本質的形相が脳裡に刻みこまれ、日毎の眺めとして眼前に浮び上るのであつた。）

そして、彼が詩作の対象として採上げる素材の圧倒的多数が、かういふたちの経験であつた。随つて彼の詩の大部分が回想されたる経験から成立つてゐる。しかも原体験と執筆との時間的隔りは非常に長いのが彼の特徴で、一年、二年——「水仙」はその例——は珍らしくなく、時には「十年の深さの潛伏所」にひそんでゐた経験がやつと詩に取上げられることさへあつた。「水仙」の中で彼は、その光景を目撃した当時は、それがどれ位貴重な富を自分にもたらしてくれたか、気づかなかつたと云つてゐるが、彼がかういふ経験が後年彼の内心の眼を訪れる頻度、または執拗さを、詩に取上げる価値の目安にしてゐるらしいのは興味深い。彼は一八〇三年のスコットランド旅行時の経験を基にして、「ヂエドバ

ラの主婦とその夫」を書いてゐるが、そのモデルになつた婦人について、旅行の同行者であつたドロシーは日記の中に次のやうに記してゐる。「私等は非常に興味を覚えたのでウイリアムはずつと後になつてから、かの婦人が引起した感銘、デエドバラを立ち去つた瞬間と同じ位に生々と彼の心中に残つてゐる感銘を、詩に表はすだけの価値があると考へるやうになつた。」

ワーヅワースが「現在の喜びを歌の内容とするに慣れず、」殆んど常にかういつた回想裡の――しかも異常に長い年月を隔てた――経験を詩作の直接の素材にした事情については、以前に考察を加へたことがあるが、[9]「夜景詩」の中の一句がいささかこの間の機微に触れてゐるやうに思はれる。即ち、彼が雲間に現れた月と星を見てゐた間、「喜びにゆすぶられてゐた」心が「おもむろに平和な静けさにかへり行き、ひとり、この厳かな光景に思ひふけつた」とある、この「ゆすぶる」と訳した言葉の原語は disturb である。「テインターン・アベイ・ラインズ」の中にも

… I have felt
A presence that *disturbs* me with the joy
Of elevated thoughts

とある。この種の原体験にともなふ感情は、常に喜びであるとは限らず、時に畏怖であり、時には恐怖ですらあつたが、たとへ喜びをともなふ場合であつても、それは心を「みだす」ものであり、'a gentle shock of mild surprise' から,a shock of awful consciousness' にいたる程度の違ひこそあれ、彼の心にショックを与へるたちのものであつた。それは実は、容易に詩の枠には収め切れないやうな、複雑で強烈な感動をともなつた経験だつたのである。ワーヅワース

の説く詩論は彼自身の体験から発したものが多いが、「詩は静かな気分のときに想ひ起された感動にその源を発する」といふ有名な言葉も、このやうな彼の異常心理と恐らく無関係ではないであらう。かういふ強烈な体験によつて烈しくゆすぶられた彼の心がもとの「平和な静けさにかへり行き、」件の体験が彼の脳裡で詩の素材として取上げられるにふさはしい形をとるためには「ひとりこの厳かな光景に思ひふける」機会を彼は幾度も、幾度も持たねばならなかつたであらう。またこの種の経験は、その底にたたへてゐる強烈な神秘性の故に、彼にとつては解くべく課せられた謎の一面をもつてゐた。彼はこれを、「馴染みの顔で私につきまとひ、私が借りをかへすまでは、成仏しない亡霊のやうに戻つて来る」(10)彼の頭の中に住む「妖精」にたとへて、この間の消息をもらしてゐる。

それでは、この「内気の妖精」は、果してどんな手管を用ゐて彼の詩の網にからめ取られたか。

かういふ経験は、彼の記憶のうちにしまひこまれ、そして幾度となく彼の回想の眼に浮びあがることによつて、無意識的精神活動の賢明な篩にかけられ、「それ自体に於ては注目するに足るが、その光景にとつては特徴的でない多くの事柄を棄て去り」(11)偶然的なものをふるひ落して次第に純化され、「その光景の理想的、本質的な真理」(11)を明らかにして行く。それは更に、後年の冥想の対象として、広大なパースペクティヴの中に眺められて以前には気付かなかつた新しい意義を帯び来り、あるひはその後新たに獲得した類似の経験と結びつくことによつて、心象や情感の点にさまざまの部分的変容を経ながら厚味と奥行を増し、次第にある明瞭な形体をとつた内容へと成長して行く。彼が「序曲」の中で、この種の神秘的体験の一つに触れたあとで、

So feeling comes in aid

Of feeling, and diversity of strength
Attends us, if but once we have been strong

(Prelude XII. 11.269—271)

（かくして、感情は感情の支援にはせ参じ、さまざまの力がわれ等に奉仕する、曾つてただ一度だけでも、われ等にして強力であつたならば。）

といつてゐるのはこの間の事情を説明したものであらう。

かうして彼の異常な体験は、彼の記憶と回想の場に於て、以上のやうなさまざまの屈折を経たのち、結局彼の詩のうちに包摂されて、一先づ収まりを得るのであるが、かういふ彼の特異の心理的習慣にからまつて、ここに面倒な問題が起つて来る。それはかうした経過をとつて詩中に収められた経験はすでにもとの体験の忠実な再現ではあり得ないといふことである。それはある意味ではもとの体験の精髄を体現したものといへようが、それは同時に、それ以外のいろんな経験の精髄を吸収同化して、変身したものでもある。そしてそれには、まま、彼の現実の体験ならぬ、読書から得た第二次的な経験さへ、取入れられてゐることがある。[12] 勿論これは詩の世界に於ける単なる仮象として提示される限り、そこに何の問題もない。しかし彼はかかる変容を受けた経験に、彼がその中核的な原体験を経験した時処に溯つた日附をあたへ、ある特定の日時と場所に於て彼が現実に経験した出来事として述べることが多い。そこにワーヅワースの詩心成長の跡を辿らうとするものの出逢ふ大きな障害がある。具体的な例を一つ挙げよう。「テインターン・アベイ・ラインズ」は、一七九八年七月、彼が五年の歳月を経て二度目にワイ河を訪れた際に書かれたものである。これが彼の詩心の成長の大きな一コマ

を自分で語つたものとして重要な意味を持つものであることはいふまでもない。彼はこの中で、五年前にここを訪れた時の自分をかへり見て「当時自然は私にとつてすべてであつた」と述べてゐる。しかし初めてワイ河畔を訪れた一七九三年夏の当時のワーヅワースは、フランス革命の大義と祖国愛の相剋に苦しみ、アネツト事件の後仕末に心をいため、「自然は私にとつてすべて」どころか、まさに人事の悩みの只中にあつたのである。彼がこの年、ワイ河畔への訪れを含む西イングランド――ウエイルズ旅行を企てたについては、友人カルヴアートの誘ひもあつたとはいへ、当時、自然の懐に飛込み、その壯大さと美のうちに自己を没入することによつて、人事のわずらひを、わずかの間でも忘却したいといふ願ひが彼の脳裡に動いてゐたことが、有力な動機になつてゐるであらう。そして旅程も進んで、彼がワイ河畔に達した時、この願ひは遂に実現された。当時彼は、ハーバート・リードの推測するやうに、肉体的疲労や心理的興奮のため、烈しい知覚過敏状態に陥つてゐた。そのため、彼の周囲に展開する自然の様相は、異常の強烈さで彼の眼底に焼付けられ、そこに 'aching joy' を味はしめ、'dizzy raptures' を経験せしめた。しかし一方では上述の人間的苦悩が、不断に彼の意識の背後にあつて、彼のこのひたむきな感覚的陶酔状態をおびやかしてゐた。いや、さういふものが夢魔のやうに意識の背後をおびやかしてゐたればこそ、彼としてはいよいよ熱狂的に自然に走り、その呈示する「色と形」の一切を、まるで「食欲」の対象のやうにむさぼり喰つたのであらう。

彼ははじめてワイ河畔を訪れた頃に覚えた、何物かに駆り立てられるやうな自分の心境を形容して

more like a man
Flying from something that he dreads than one

Who sought the thing he loved

（愛するものを求めるといふよりは、恐れるなにものかから逃げ走るやうに。）

といつてゐるが、この謎めいた異様な表現のよつて来る所以のものは、これを上述のやうな心理のコンテクストの中に還元するとき、はじめて了解出来るのではあるまいか。

以上の考察によつて、ワーヅワースが件の詩の中で「私にとつて自然はすべてであつた」といつてゐるのは、実は彼が最初にワイ河畔を訪れた際の一時的状態であつたこと、またその状態は決して無条件的にさうであつたのではなく、当時すでに深刻な人間的苦悩が彼の心をむしばんでゐたこと、またさういふ事実が彼のかかる感覚的陶酔状態を惹起せしめる有力な動因の一になつてゐることがほぼ明らかになつたと思ふ。ところが彼は詩の中では、このやうな状態を、「喜びに充ちた動物的運動」と「粗野な快楽」を伴つてゐた彼の少年時代と、そしてこの詩執筆当時（即ち二回目にワイ河畔を訪れた当時）の壮年時代とによつてはさまれてゐるところの、幾年かに亙る彼の青年時代全般に通ずる状態であるかのやうに語つてゐる。その上詩の中では最初ワイ河を訪れた当時に彼のになつてゐた人間的苦悩には全然触れてゐない。いや、その時の状態を「物思ひなき青年時代」'the hour of thoughtless youth' と呼ぶことによつて以上の複雑な事情を全然抹殺し去つてゐる。明らかにここには、彼の過去の閲歴の一部を隠蔽しようとする意識が働いてゐるであらう。このため、彼の初めてワイ河を訪れた当時の彼の実際の原体験と、その後の冥想によつて変容され、そして件の詩の中に原体験として回想されてゐるものとの間には、複雑な虚実のあやが生れて来てゐる。彼は五年前の自分の眼に映じた自然の色彩と形相を説明してそれらは彼にとつては自足的なもの、即ち

An appetite, a feeling, and a love,
That had no need of a remoter charm,
By thought supplied, nor any interest
Unborrowed from the eye.

（思想のもたらす間接の魅力も、視覚以外のものに由来する興味も必要としない、欲求、感覚、熱愛）

であつたと述べてゐるが、この言葉は上述の事情を知るものにはアイロニーにひびいて来る。彼は更に語を継いで、現在の彼の到達した心境を説明して

I have learned
To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth; but hearing oftentimes
The still, sad music of humanity,
Nor harsh nor grating, though of ample power
To chasten and subdue.

（私は、物思ふことのなかつた青年時代とはちがつて、浄めやはらげる充分な力はありながら、耳障りでもなく軋りもしない、人間性の奏でる静かでかなしい音楽を聞きながら自然を眺めるやうになつた。）

といつてゐるが、結びつけられるべき人間的苦悩は実は五年前の当時から「耳障り」な「軋る」音を立てて、自然の与

へる「痛烈な喜び」「目くらむやうな恍惚感」と彼の脳裡に共在してゐたのである。問題はむしろ、この烈しい対立関係にある彼の心中の二要素を如何に浄化し、調和して全体的な詩的経験のうちに包摂するかといふ点にあつた。

以上、「テインターン・アベイ・ラインズ」に回顧されてゐる五年前の彼の経験が如何なるたちのものであるかを検討して来たが、

The sounding cataract
Haunted me like a passion

（鳴りとどろく大滝は私につきまとつた、まるで情熱のやうに。）

といふ驚くべき詩句も、実はかういふ、苦悩と熱狂的な喜びのあやしく入交る不安と動揺に充ちた心理を基盤として生れ出たものであつた。以上のやうな背後の事情を明らかにした上で、更めてこの詩を読みかへすとき、回想裡に原体験を浄化し、醇化し、それを 'something rich and strange, にかへて行く詩人の想像力の不可思議な作用に驚嘆を禁じ得ない。このやうな原体験と回想との関係は、「霊魂不滅の賦」にうたはれてゐる幼時の回想にもあてはまるであらう（しかも彼はこの詩の中で、自分の魂の成長史に一つの神話を持込んでゐる）。そしてこの事は更に大規模に「序曲」についてもいひ得ることであるまいか。そこには、ウイリアム・ギヤロッドの認めたやうな、己れの自伝的事実に関する正確忠実な記述と並んで、経験の大胆な融合同化と省略と変改の跡が認められる。これはワーズワースの内面的経験を材料とし、彼の理想的分身の詩心の成長を描いた一個の創作と見らるべきものではあるまいか。

ここで話を、先きの「水仙」と「夜景詩」の両詩に戻さう。この二詩をドロシーの日記と比較して、それらがドロシ

ーの記述に負ふところ非常に大きいことを見て来たが、実はそれらはドロシーの記述だけを素材にあふいだのではない。どちらの詩の場合も、彼は妹と同行して、件の日記に記載されてゐる経験を共にしてゐるのである。そこにははじめから、拠るべき彼自身の原体験があつた。その体験はその性質に於て、恐らくドロシーのそれと共通するところが多かつたのであらう。ドロシーの日記中、自然の印象を詳しく記したくだりを読むとき、両人の外界の印象の受入れ方について、ものの感じ方について、非常に相似たもののあることを感じさせられる。その上彼等は、彼が独自の詩風を樹立する以前から同居して、文芸方面を含む百般の事柄について自由に意見を交換し、書きものを互ひに読みかはし、普通の兄妹関係に見られるよりも遙かに親密で内面的な影響を及ぼし合つてゐるのである。かういふ生活様式は元々両人の間に存在してゐた相互の心性の類似をいよいよ昂め、両人の内面生活に於ける同心一体性を強化したであらう。にもかかはらず、ウイリアムの心性にはドロシーの理解の及ばない或る領域があつた。即ち、彼が後に自分の詩作の対象に取上げるやうな、ある異常の瞬間に於ける原体験には、「序曲」その他の材料から推察して、ドロシーのそれに比べて遙かに広大、複雑で、神秘的な要素があつたと考へられる。彼等が「水仙」執筆の動機となつた水仙の群を見た日は、非常に風の烈しい、嵐気味の日であつた。彼等はその日の午後ドブスン家に向つて出発したが、あまりに風がはげしいので同行者の一人は引返し、彼等も出かけて来たのを後悔した位であつた。また途中でも彼等は幾度か、あちこちの小屋で休息してゐる。あの水仙の大群を見た記述のすぐ後にも、彼女は「すべてはわびしく、憂鬱であつた。そんな風にしてわたしらは嵐に逢つたのだ」と記してゐる。それは兄の詩の冒頭の、「私は渓や丘の上高くただよふ雲のやうにさまよつた」といふ句によつて、読者が脳裡に浮べるやうな環境とは大分へだたりがあつたのである。さて彼は、かういふ環境の下に、この水仙の大群に出逢つ

て、どんな感じを受けたか。彼は先づ、その花の群の圧倒的な数に、次にはそれらが目路の限り、岸辺に沿つて延びてゐる、そのひろがりの大きさに打たれたであらう。銀河のうちに微光を帯びて輝く無数の星程に、宇宙の広大さと数のおびただしさを痛感させる自然の現象は一寸あるまい。彼がここに持出してゐる銀河の星の比喩は、恐らく後年の回想時のものであり、ヘンリ・ヂエイムズの所謂「無意識の脳髄作用の暗い井戸」(13)から浮び上つた聯鎖であらうが、彼が原体験時に受けたと想像される数と延長の大きさから来る感動の性質をよく彷彿させてゐるやうに思はれる。しかもこのおびただしい数の水仙が、嵐に向はうとする険悪な空の下で、湖心は「海のやうに」立騒いでゐる岸辺に沿ひ、湖をわたつてぢかに吹きつけて来る「息の止る」やうな烈しい風にもまれて、縦横無尽に揺れ動いてゐるのである。この、風にもめげず、哄笑するが如く、舞ひをどるが如くに揺れてゐる水仙の群は、一方から云へば、群衆の歓喜の動揺を想はせるものがあつたとともに、このやうに、身をさけるすべなく、強風の弄ぶままになつてゐる可憐な花の大群のありさまには、何かつきつめた、トラヂツクな感じをさそふものがあつたであらう。ドロシーが、をどりつかれて石に枕してゐるやうに見えたと記してゐるいくつかの花も、その実は、風の烈しさに堪へかねて吹き倒された花だつたのであらう。「どれ程卑しい花にも涙にあまる想ひ」をいだき、一本一草にも文字通り有情の生命の息づくのを感じるていの情感の持主が、この光景からどんなたちの「ショツク」を受けたかは、ほぼ想像し得られるやうに思はれる。かうして彼が湖畔に立つて、強風に揺れ動く水仙の群から受けた全般的印象は、広大なるもの、おびただしいもの、しかも生命あるものの総体的動きからかもし出された、一口では云ひがたい、複雑で、神秘的な感動であつた。それは容易にその本質を補捉しがたく、また言語的表現をあたへがたい経験であつた。そして、さういふ経験こそは、後で幾度となく彼の回想にのぼり、執拗にその表現をせま

る「妖精」だつたのである。かういつた、多くの面を持つた渾沌たる経験にある枠をあたへ、詩の素材として扱ひやすい形態にととのへることは容易なことではなかつた。そして、兄に似たところを多分に持ちながら、兄にくらべて振幅のせまいドロシーの感覚と情感は、より容易にかかる印象を統一、単純化し、それに対応する言語表象を与へることが出来た。この意味で、ドロシーの日記の記載は、ワーヅワースのより幅広い、より複雑な原体験を単純化し、それに輪廓を与へるのに有力な手がかりとなつたであらう。彼がある短詩の中で妹をたたへて「彼女は私に眼を与へ、耳を与へてくれた」といつてゐるのは象徴的である。水仙についての彼のこの体験は、あるひはドロシーの日記がなくとも、遂には詩といふ形をとつて現れたかも知れない。しかしそのときは、いま見る「水仙」とは恐らく別の「水仙」詩が生れたであらう。この意味で「水仙」はワーヅワース兄妹の合作といふことも出来よう。普通に所謂合作よりも、もつと内面的な意味に於て。以上のやうな事情を考へるとき、「水仙」詩中に回顧されてゐる経験は、実はワーヅワースが現実にその水仙の群を見たときの光景の忠実な再現でなくて、その後幾度かの回想のうちに彼の「内心の眼」に閃いた光景――原体験がドロシーの記述によつて方向づけと輪廓を与へられつつ、ワーヅワースの想像力によつて浄化と変容を受け、ヴイジョンにまで昇められた光景――といふことになるであらう。

さて、先きに「夜景詩」の中で、ドロシーの日記の記述のうちに欠けてゐるか、あるひは微弱にしか現れてゐない要素として空間的なひろがりの感覚とそれに結びついた運動の感覚とを認めて来た。これまた「水仙」の場合と同様、ワーヅワースが気まぐれにつけ加へたものではなく、彼の原体験のうちにはじめから含まれてゐたものであつて、それがドロシーによつて与へられた枠の外にはみ出て彼の詩のうちに現はれ、彼の神秘的な経験の片鱗をのぞかせてゐるのである。

彼があの曇天の夜、雲間が切れた数分の合間に見て心打たれた印象――無限の彼方にある月と星の集団が一体となつて飛走する光景は、恐らく彼をして一瞬、身の地上にあることを忘れさせ、地球をつつむ天球の広大な回転運動をまのあたり見るやうな幻覚を覚えさせたであらう。ワーヅワースは、ある内的又は外的な原因によつて感覚が異常に鋭敏になつてゐるとき、外界の事象からよく圧倒的な、神秘的な感じを受取るのであるが、さういふ場合、何等かの意味で空間的なひろがり又は延長の感覚が関係してゐることが多いやうに思はれる。かういふ経験が高潮に達したとき、無窮のひろがりが自分の魂のうちに瀰漫する感じと、自分の意識が無窮のひろがりに拡大する感じが一体となつて彼をおそひ、彼を一時、忘我の状態に陥らせる。彼が見えざる世界に手をとどかせ、宇宙との一体性を感じるのはこのやうな瞬間である。

In such strength
Of usurpation, when the light of sense
Goes out, but with a flash that has revealed
The invisible world, doth greatness make abode,
There harbours.

(Prelude VI ll. 599—603)

（感覚の光が、見えざる世界をてらす一閃をもたらしつつ、消え去るとき、かかるすべてを奪う力のうちに、偉大さはやどり、そこにやすらふ。）

とはかういふ瞬間に於ける彼の体験をものがたるものであらう。

この種の経験を与へる外界の諸象が彼の精神に及ぼす作用を端的に言ひあらはす言葉として、彼の好んで用ゐる形容詞は‘mighty’であらう。彼はこの語のうちに、自分の感得した、伝へんとして伝へるを得ない、広大複雑な感覚、感情の一切を托してゐるやうに思はれる。彼はこの言葉を彼の全詩集中に百八個用ゐてゐるが、それは彼の最も初期の作品からもつとも晩年のそれに至るまで、極めて広範囲に用ゐられてゐる。もつともそのことごとくが以上のやうな神秘的な意味に用ゐられてゐるわけではないが。その今述べた意味、あるひはそれに近い使用例の代表的なもの若干を挙げると次の通り。

A *mighty* waste of mist the valley fills
（Descriptive Sketches）

What *mighty* objects do impress their forms
（Borderers）

’mid all this *mighty* sum
Of things forever speaking
（Expostulation and Reply）

all the *mighty* world
Of eye, and ear
（Tintern Abbey Lines）

Listen ! the *mighty* Being is awake!

('It is a Beauteous Evening')

And hear the *mighty* waters rolling evermore

(Immortality Ode)

huge and *mighty* forms, that do not live

Like living men,

(Prelude I ll.398—9)

（以上にあげた諸例中、ワーヅワースが自然観について独自の立場に到達したと思はれる頃に書いた「諫告と応答」に於て今述べた意味の'mighty'の用ゐ方が確立してゐること、また彼の哲学のもつとも端的な表現である「テインターン・アベイ・ラインズ」と「霊魂不滅の賦」の中に、この意味のもつとも典型的な用例が見出されること、更に、「序曲」中、彼の幼時の神秘的経験を記した章に、この語が深い意味を帯びて用ゐられてゐることに注意したい。）

ところで、今まで検討して来た、以上のやうな、ワーズワースの感情、乃至感覚は、彼の幼時の経験のうちからすでに認められるところであつて、それはその原初の状態にあつては、必ずしも精神的な内容や意義をもつものでなく、むしろ神経症的な一面を持つものであるやうに考へられる。そしてワーヅワースが詩人として大をなした一因はかういふ経験をよく消化し、それをスピリチュアライズした点にあるやうに思はれる。それではそれは彼の幼時にどんな形をとつて現れてゐるであらうか。またそれはどんな経過をとつて変容され、彼の詩のうちに摂取せられたか。次にそれを考へて見たい。

註

(1) 本稿は筆者に交付された昭和廿五年及び廿六年度文部省科学研究費による成果の一部である。

(2) G. M. Harper はこの項の記載が「夜景詩」と関係があることに気付いてゐるらしく、評伝中に一月廿五日の項と共にこの一節を引用してゐる。

(3) 以下ドロシーの日記と「水仙」との比較については T. A. Pottle 氏の論文 'The Eye and the Object in the Poetry of Wordsworth' (Wordsworth Centenary Studies ed. by G. T. Dunklin Princeton 1951 に収載 pp. 23—45) の示唆に負ふところ多い。

(4) 無論ここにいふ「水仙」は日本で普通に見る水仙 Narcissus Tazetta とは異る。英国で daffodil と呼ばれてゐるのは Narcissus pseudo-narcissus のことで、これはイングランド中到るところの野原や牧場で見られる。しかも水仙属中、英国で唯一の野生種である。詩にうたはれてゐる通り、花は黄色であるが、花瓣 (petal) の色は花冠 (cup) のそれに比しやや薄い。花冠の形から Trumpet Daffodil（喇叭水仙）の異名がある。日本の水仙は一本の花茎に数個の小さな花をつけるが、daffodil は大きな花を唯一個つける。高さは約一呎半。花茎や葉の形状は日本のそれと大差ない。これはまた花期の関係から Lent Lily の異名があり、風寒い三月頃から、燕の飛来に先んじてそろそろ咲はじめることはシェイクスピアの有名な句にもある通り。

尙黄色の花をつける水仙属としては外に Jonquil（黄水仙）がある。これは daffodil に比べて花茎が非常に長く、且細く、これならば成程微風にも大きくゆらぎさうで、ワーズワースの「水仙」にはあつらへ向きであるが、これは英国には野生しない。小生の手許の M. Skene の A Flower Book for the Pocket あたりにも Jonquil はのつてゐず、水仙属としては先きの意味の daffodil 一種だけがあがつてゐる。約百五十年まへ、アルズウォーター湖の北岸でワーズワースの見た水仙は、「喇叭水仙」であつたことはまづ間違ひなからう。

(5) Wordsworth Centenary Studies p. 29.

(6) この問題については拙稿「ワーズワースのソールズベリー——ティンターン旅行」（「文学研究」第三十七輯所載 pp. 76—78）及び「ワーズワースに於ける自然観の進展」（「文学研究」第三十八輯所載 pp. 36—41）を参照されたい。

(7) William Garrod : Wordsworth 1927 p. 98.

(8) 拙稿「ワーズワースに於ける自然観の進展」（「文学研究」第三十八輯 p. 30）参照。

(9) 拙稿「ワーズワースと詩の生成」（「オベロン」誌第四巻第三号昭和十六年八月発行所載 pp. 1—19）

(10) Wordsworth : Waggoner Canto IV Il. 213—215.

(11) ワーズワースが記憶の作用につきオーブリ・ド・ヴィアに語つた言葉（R. D. Havens : The Mind of a Poet Vol. I p. 18 に引用。

(12) たとへば「序曲」第十四巻に語られてゐるスノウドン山上からの眺望のうちに Beattie の Minstrel の一節の遺響がまぎれ込んでゐるが如き（de Selincourt 編纂 The Poetical Works of W. Wordsworth Vol. I p. 328 参照）。

(13) J. L. Lowes : The Road to Xanadu Revised Ed. 1930 p.480.